

82

令和6年10月5日

《作務特集》

明珠

龍泉院参禅会会報



表紙写真

坐禅堂の外単に吊り下げられている木製の魚の形をしたものは、「なまけ柳」といいます。体は魚で頭は龍という想像上の魚です。大きな口の中にある丸い珠は、お腹から吐き出した「なまけ心」の象徴です。鱗の中央の丸い部分を撞木で叩いて、修行者へ食事の合図をします。

(撮影：小林裕次氏)

『心をもて学し、 身をもて学す』



龍泉院住職

明石 直之

道元禪師の正法眼蔵に『身心学道』の巻があります。その中で、学道（佛道を学ぶ）には二つの方法があると述べておられます。心学道（思慮する学道）と身学道（実践する学道）です。この二つはそれぞれが反発し合うものではなく、不可分の関係であるとしています。これについては、心を持たない身体は無く、また身体から離れた心が無いのと同じようにとらえることができると思います。ですので、『心をもて学す』とは『身をもて学す』という要素を多分に含み、『身をもて学す』も「心をもて学す」という要素を多分に含んでいると言っても過言ではないでしょう。要するに、佛道を学ぶには、身心を挙げて取り組まなければならない、ということを書いた巻であると考えています。

さて、思慮する学道である『心学道』について、身近なものでいうと勉強に例えること

ができます。私を含め世の人たちは、学生時代にはみっちり勉強してきたことと思います。では何故、勉強をしてきたのでしょうか？今の時代で一番多い答えは、やはり「良い学校」に入るためとか、「良い会社」に就職するためにとかと思えます。そのためか、大学に合格したり、良い会社に就職したりすると、多くの人はこれまでのような勉強をすることを止めてしまいます。またそうでない人も、学校で習ったことはこれから先の人生で使うことはないだろう、と思っている人も多いかと思われまます。確かに、微分積分や三角関数を日常で使っているかという、そんなことはありません。フレミングの法則や質量保存の法則を知らない、日常生活に支障をきたすかという、これまたそんなことはありません。しかし本当にそれでいいのでしょうか？私はこの『心学道』について考えた

際、勉強というのは、ひよっとしたら、学んだことについて「一年に一回使うかも知れない」、あるいは「一生に一度使うかも知れない」と思っただけです。はなから学んだ内容に興味が無いと思っただけ生活するよりも、いつか使うかも知れないと思っただけ生活することの方が、よっぽど人生が豊かになると思っただけです。

ですので『心学道』とは、学ぼうとする事柄について、「一年に一回」「一生に一度」使うかも知れないという心を持って思慮することだと思っただけです。そして更に一歩進めて、それで終わりと思わずに、「一年に何回も」「一生に何度も」使うような場面に身をもつて飛び込み、切磋琢磨すること、それがもう一つの学道である『身学道』といえるのではないかと思っています。

最後に、正法眼蔵随聞記には、道元禪師の言葉として、「道を得ることは正しく身を以て得るなり」という言葉があります。この記事の初めに、心学道と身学道は不可分であるという旨を記載いたしました。学道とは、車の両輪のように、心をもて学し身をもて学すことだからです。しかし、ここでは「身を以て得る」ことを強調されています。何故なのか？それは、最後は『身をもて学す』ことになければ、心が現実から離れてしまい、抽象（具体性の欠けた）の世界に迷い込んでしまうことになるからです。ですので、道元禪師が言いたかったのは、人生の大道というのは、「学を育む道」に飛び込んで挑戦すること、言い換えれば、学んだことを実践できる舞台に身を置いてそこに立ち続けること、と伝えたかったのかも知れません。

従容録に学ぶ(七二)

龍泉院東堂 椎名 宏雄

第六四則 子昭承嗣

〔示衆〕

衆に示して云く、韶陽、親しく睦州に見つとも香を雪老に拈す、投子は面りに円鑑に承けながら法を太陽に嗣す。珊瑚枝の上に王花が開き、藟林の中で金果を熟れ。且道な、如何せば造化来を。

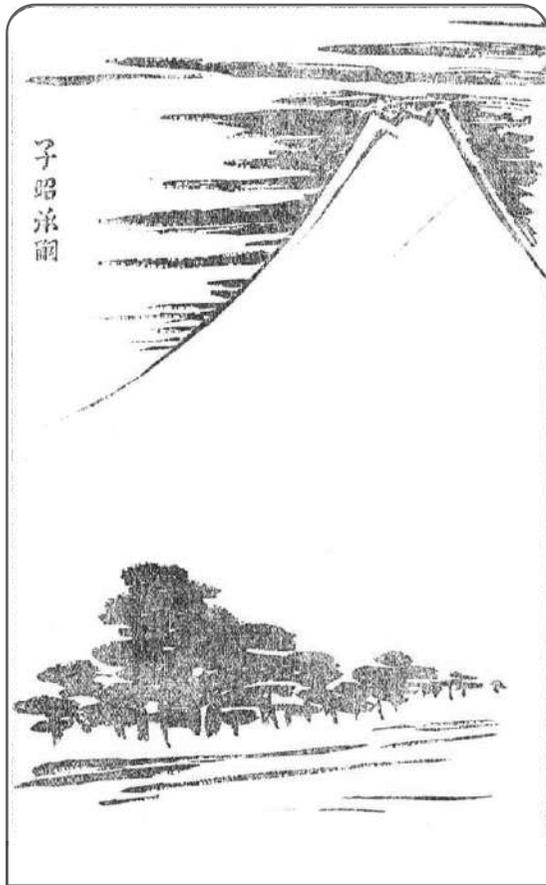
〔本則〕

挙ぐ、子昭首座、法眼に問う。「和尚が開堂のときは、何人に承嗣するや?」「早く今日の閑管成ることを知らば、悔いたことは当時は好心を用いざればと云うことを。眼云く、「地藏なり。」「恩の帰する地あり。昭云く、「太だ長慶先師に辜負きます。」「肘も膊も外がわに向つては曲がらず。眼云く、「某甲は長慶の一転語を会せず。」「伴つて知らざる打をす。昭云く、「何ぞ問わざる?」「狼を引得り来れば屋裏で廁をす。眼云く、「万象の中、独露身」と。「その意は作麼生

な?」「観面に相呈せり。昭、乃に弘子を堅起る。「両重の公案なり。眼云く、「此は長慶の処にて学得だ底なり。首座として作麼生?」「管を劈され、窠も奪わる。昭、語無。「只だ跳得し、一跳たすべし」。眼云く、「只だ万象の中独露身の如きは、是れ万象を撥るか万象を撥かざるか?」「却つて胡蘆が到に藤に纏われり。昭云く、「撥かず。」「話両概と作れり。眼云く、「両箇なり。左右のもの皆云く、「万象を撥くべし」。」「転に堪えざるを見る。眼云く、「万象の中、独露身なり。響」。」「両彩で一賽なり」。

この一則は難

物です。意味・内容・コメントのいずれも、おそらく『従容録』の中では難解のベストスリーに入るでしょう。ハハーそれでこれまでは取り上げなかつたのだなと思われ



凶星です。でももう時間がない以上、挑戦にしかずです。禅門では初めて出世(住職)する時、その儀式(結制という)で、自分が誰の弟子であるか(嗣法関係)を涙ながらに公表します。現今では形式的になっていますが、昔ほど大問題とされ、関係者大勢が集まってこれを固唾を飲んで注目したのです。この一則は法眼の嗣法にまつわるお話で、上役の子昭とのお話です。ここに出てくる人々を分かり易く系図で示すと次の通りです。みな唐代のエライ禅匠

ばかり。もつとも洞山さまは、ちよつと別の系図に入ります。

雪峰義存 — 長慶慧稜 — 子昭首座

「示衆」の文意は次の通りです。

雲門（ここでは前歴の韶陽とも）は睦州の下で長く参学したのに雪峰の法嗣となり、投子（義青）は浮山法遠に師事したのに大陽警玄に嗣いだ。その結果は玉花開き金果完美したのはどんな培養かな？

こんな意味です。さあ、「本則」が大変。子昭が法眼に嗣承を聞いたら地藏だと答えたので、長慶に背反いたのではと詰問したことから長い応酬が続く、結局、皆が「万象の中独露身」で大円団となります。万松がこの間にむつかしい著語（コメント）をふんだんに付けていますが、要するに、これは大きな大きな仏縁だったのでですね。

如是経を転ずるといいますが、これが万象の中で真実に努力精進するあり様であり、決して難しい經典を解説精進することなどではありません。道元禪師はさまざま難しい経

典も学ばれ、学者としても超一流であり、前人未到の『正法眼蔵』を百巻近く遺されましたが、その反面で「夜もすがら終日になお法の道、みなこの経の声とこころと、（『傘松道詠』）と詠っておられるではありませんか。私の卑近な事例で恐縮ですが、難解な經典などでどこ吹く風ながら、普段の生活そのもので独露身のな如是経を転じていた自分の本師が忘れられません。個人的な事をお許し下さい。

私は高校の時に両親を失いましたが、近親者は皆将来を見越して、大藍名利の住職からの出家得度を勧めましたが、気が乗りませんでした。むしろ心動いたのは、来客には自分でコンロの火を焚いて湯を沸かし茶を入れ、夕方には自作の薪で焚いたドラム・罐の風呂に入る極貧の生きざままで、しかも四五歳も年長の老耄僧であり乍ら、暁天坐、朝課は欠かさず、法事には多種の経文を大声で読み、私が到底真似の出来ない方であり、結局この老僧に得度し、大法の嗣法を受けたのです。

結婚も似ていました。大藍名利から数多あった縁談はみな断り、あの娘が高校に入ったと近所から後ろ指を指され、バイトでやっと卒業したけれど、働きの真面目な貧女と縁を結んだのです。極め付きは学位論文です。中

年に大東出版社から出した七百頁以上の学術書を、指導教授且つ大学総長であった鏡島元隆先生から博士論文として申請せよという慫慂だったが、あえてその意図で著したのではないとお断りしたのです。尤もこれは後になり、自分だけの意志で良かったのか、とやや反省はしましたが。

とまれ、こんな常識はずれの言動は、決して禅の達人達の生きざまとは異なる。だが、懶惰でも恪勤でもない一禅者の生きざまであることは紛れもない事実です。何という大損な生きざまだと、人に呵々大笑されること必定でしょう。

でも私は、六三年間も貧寺の住職をしてきたからこそ、若干のヒマがあり、大小二〇棟もの建物を造り、五〇年間も参禅会を続けられ、無数の有能な方々との交流が結ばれ、ユニークな諸行事を行なえ、その合間には三六一年間に数百の宗門寺院や博物館等の調査、それに高校以来の三千m以上の高山登攀三〇回以上と、したい事やりたい放題をしてきた生涯でした。思えば大果報者、大満足者の歩みであり、寺の生活は何という有難い生活の場かと感謝です。挿絵の様に、諸山中の英峰富士の如き独露身そのものであります。

第九七則 光帝幞頭

〔示衆〕

衆に示して云く、「達磨、梁の武に朝る。本の心を伝えんが為なり。塩官、大中を識る眼を具うるを妨げず。〔天下太平・国王長寿〕と云つて、天威を犯さず。日月景を停めず、四時和適う。人王と法王との相見には、合に何事をか談ずべきや？

〔本則〕

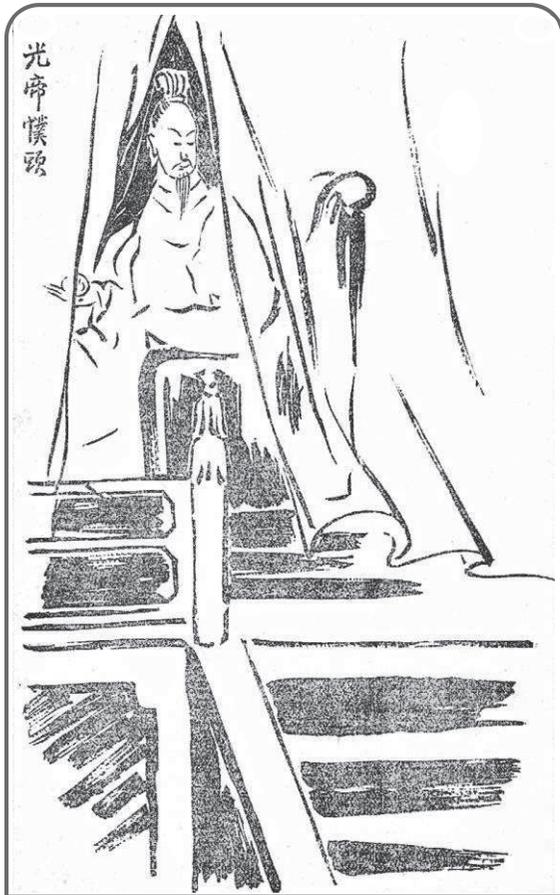
挙ぐ、同光帝、興化に謂つて曰く、「寡人は、中原の一室を収れ得たり。〔少売売りか〕。只、是れ人も価を酬べるなし。〔国を仰しても換うることを莫し〕。化云く、「階下の宝を借さば看ん。〔更に勢いに接す〕。帝、両手を以て幞頭脚を引く。〔幸いに其の人に遇う〕。化云く、「君主の宝は、誰か敢えて価を酬べん。〔一併に交わり足れり。別に少欠の人も無し〕。

今回は第九七則の「光帝幞頭」というむづかしい名称の一則ですが、中身は比較的やさしい公案なのです。何故かというところ、『明珠』に『従容録』を載せたのは第二号（昭和六〇

年一〇月五日刊）の達磨忌の日に合わせて、右の「達磨廓然」の則を最初に取上げたのですから、それからもう三〇年も経過しているのですね。私はもうすっかり老耄の難症者になりましたが、右の第二号を繰広げてみますと、案外良い事を書いてありますよ。それだけ若かったのですね。今回はむろん同じ事を書きはしませんが、皆さん、どうか前の第二号をご覧になって下さい。要は達磨さんが梁の武帝に「空」のすばらしさを教えているくだりです。

「達磨廓然」の公案は、インドから菩提達磨が中国に禪を伝えるために渡来して、梁国の武帝と問答を交わした。帝が仏法の第一義を尋ねたら、達磨は「廓然無聖」（絶対空）と答えると、帝「朕に對する者は誰

か？」と聞く。達磨「不識」（思量分別を絶したこと）と答えたので帝は分ならず、遂に達磨は長江を渡り少林寺に行き面壁九年した、という有名なお話。空とは大乘仏教の根本思想ですが、ごく分かり易くいえば私たちが心に何のひっかかりもないことですね。これだけの予備知識があれば、この一則はいとも平易。私の無心体験をひとくさり。私は大学一年の夏休みの時は、新潟県柏崎市から約七㎞ほど南に入った山中の宗門寺院で坐禅修行をし



ました。まだ満一八歳。名ばかりの出家得度をした青二才でした。正しくは刈羽郡上条村久米、寺の名は普伝院。堂頭様の名は栃堀真雄老師。大陸からの兵役帰りで、お子様方は五名おられました。奥様はもう故人にされましたが、今の永平寺副貫首羽仁素道老師の実姉、喜美代様であり、昔はこのお寺で苦勞三昧をされたのです。当時、栃堀老師は東京高輪泉岳寺の執事、前は私の父正雄の教え子であり、泉岳寺御住職小坂準爾老師と正雄は昵懇の間柄という諸縁からこうなつたのです。とまれ、庫裡の二階に「居候」となつた私は自分の洗濯と自部屋の掃除の他は、寺の内外の掃除の手伝いとお子様を時々遊ばせる外は専ら勉強三昧でした。

でも堂頭様のご指導よろしきにより、約一か月で宗門の粗方の読経や葬儀などの基本的な儀礼をマスターし、一度はご家族と一緒に柏崎市の南側で海水浴場として名高い鯨波に連れて行つていただいた事もあります。とにかく、寺はお店もコンビニも皆無の山中であり乍ら、毎日奥様は工夫して手料理を作り、地元米の美味とともに忘れられない楽しく有難い夏休みでした。

帰りは鄭重なお札を述べて柏崎までは一日

一往復の路線バス。駅で大きなトランクはチツキ（乗車の乗車券で同時に送れる荷物）に出し、あとは上越線の夜行列車。お寺からはお土産にとリングと称する重い二箆を頂戴しました。乗車して間もなく警察官が乗込んで来た。各自の荷物調べです。その頃は米を都会に運び高く売れる者が多かつたので、いわゆるヤミ米の一斉取締りでした。私は二つの「リング箆」を通路との間に置き悠々と眠りこけて上野着。柏までは又列車、バスで帰寺。

イの一番に重いリング箆を明けたところ、アツと腰を抜かす程驚きました。中にはあの美味極まりない越後米がドツサリだつたからです。道理で重かつた。でもあの重さはお寺のご夫妻による鄭重極まりない重宝だったので。それ以後、私は無心やこだわりを考えず、常にあの「リング箆の重宝」を追慕しないことはない。知らぬが仏というが、正に無心の時は仏さんなのです。別の言葉でいえばこれが「空」。達磨はこれを武帝に教えたが、理解されなかつたので、仏教が盛んだつた北方に行つて坐禪三昧。時は六世紀初頃。時は移り二百年も後の唐末破仏の時勢、洞山さんも隠遁しましたが、宣宗皇帝は難を逃れて自ら出家して禪を学ぶ。興化は臨濟義玄

龍泉院大悲殿にある栃堀老師揮毫の掲額



の法嗣、興化存獎です。幞頭脚とは甲頭巾という冠の一種に付いている四つの垂れ飾り。これで難語は分かれますね。あとは破仏が治まつて宣宗が復位した時、昔の達磨と梁武のやり取りを意識してであろう。宣宗と興化が似たような問答をした。その時のルーツ本則というわけです。今則では長大になるので「示衆」と「本則」だけで、宏智の「頌」以下を省略しましたが、全ての部分で宏智も万松も両者の応酬を讃嘆しておられます。私の小さな無心などとはスケールが段違いですが、後に栃堀老師は神奈川県平塚市の荒れ寺であつた浄心寺を立派に復興し、声明という特殊讃仏の大家として名をなし、大雄山最乗寺の維那役を務め、二〇二〇年に一〇三歳の天寿を全うされました。市長さんや各界から祝寿を受けておられました。龍泉院大悲殿内の中程に掛けられている「圓通智力」の文字は、九〇歳ごろのご揮毫であります。

作務 特集

禅門では「作務」と称する清掃・炊事・庭や建物の手入れ・農作業など全ての労働を、重要な修行と位置づけております。龍泉院参禅会では、平成二二年松井さんの発案で庭木等の手入れを行うようになり、今では多くの会員が参加。竹林整備は相澤さん・小林さんが、坐禅堂清掃は五十嵐さんが中心で行われています。

「私と作務」 ―サンガを指す―

柏市 松井 隆

私は参禅会に参加して二九年目になります。サンガを指すこの参禅会に魅せられました。年とともにエブリーサンデイの暇人の勢でしようか、禅の修行実践にトライして有意義な人生を送らせて頂いています。

龍泉院参禅会では、旅行や色々な禅に連なる体験を数多く積み重ねることができました。最も楽しかったのは、節目の年の記念旅行に参加できたことです。中でも、中国旅行に参加し、以来中国には「仏教東漸の旅」となり、その旅がタクラマカン砂漠から、パキスタンのガンダーラ、インドお釈迦様の八大地巡り等に繋がる大いなるツアーの巡り合わせを戴きました。

また、実践体験では、接心や成道会の典座

に挑戦でき、さらには作務にもトライできたことです。作務については、平成二二年降誕会の際、当時会員の小山氏と共に椎名御老師にお願いをしたところから始まりました。

椎名御老師は常日頃「作務も禅の実践なり」と述べられ、一五年も続けてこられました。参加者も一〇名を超えるまでになり、多くの参禅会会員に自主的に参加頂いて、あの広い境内・墓地・裏山・竹林等が作務道場と化する程になりました。

『明珠』簡介で公示しの通り、毎月第一と第三金曜日、及び第二土曜日の午前のみと定めて作務を実施。一〇時からの喫茶もお菓子を摘みながらの語らいも一味です。

作務の目指すところは「寺は綺麗に」です。低木、中木の剪定、草取りなど適宜実施して

います。高木は危険を伴いますので、脚立(約3m)が届く範囲で実施しております。

選定の樹種は、春先五葉松の新芽搔きに始まり、参道の躑躅の刈込み、小目柘植の小玉仕立て、夏の紫陽花の花後の手入れ、梅、椿等の仕立てです。やはり本数が多いいのは躑躅の刈込みと紫陽花の花後の剪定です。春から夏にかけては大変忙しく、臨時作務で何とか対応しています。

このサンガは正に覚りの世界のようなようです。お陰様で、檀家の方や門前を訪れる皆様方からお褒めのお言葉を頂戴して益々やる気満々と言ったところです。

合掌 ⑥

作務に「三徳」あり

柏市 岡本 匡房

作務というと、すぐ境内の掃除、樹木の剪定、草刈りなどが頭に浮かぶのではないだろうか。実は各種ある。典座、明珠の編集、雲堂の整理・整頓、例会や自由参禅の時の準備、各種行事への参加もまた作務といえる。だが、やはり作務の中心は境内での作業だろう。

これには三つの「徳」がある。一つが「境内の美化」。境内は広い。その樹

素晴らしい 作務仲間

・前列左から—
岡本 匡房さん
佐藤 修平さん
松井 隆さん
坂牧 郁子さん
・後列左から—
小畑 二郎さん
小畑 学さん
中原 悦雄さん(故)
(令和3年11月
小林裕次氏撮影)



木の剪定、草刈りはいくら行っても終わりが
ない。だが、それを整えることは参拝者の龍
泉院への愛着を増そう。

第二が「健康の保持」。作務の時間は朝九時
から二〜三時間。この間、汗を流すことは参
加者、特に運動が必要な高齢者の健康には極
めて有効だ。

第三が「懇談によるコミュニケーション」。
一〇時ころ、明石師を囲んでのお茶タイムが
ある。ここでは法話などではなく明石師の体
験、考えがいろいろ聞ける。また、参加者同
士の親睦も図れる。「タケノコご飯の会」など
も、ここで持ち上がった。

いわば作務は龍泉院のために行っているの
ではなく、自分自身のために行っているとい
える。その意味では「三徳」ではなく「三得」
といった方が妥当かもしれない。

ちなみに『「参禅会」の名は単に坐禅をする
だけではなく、このような各種奉仕も入って
いる』これは前代表幹事小畑節朗さんの言葉
である

ただ、作務は二週間に一回。夏場は樹木の
成長に追いつかない。残念ながら、今の人数
ではなかなか、対応できない。是非、多くの
方に参加していただきたい。

合掌

《遺稿》 禅と私

白井市 中原 悦雄

私は、少年時代に恩師から「禅をやりなさい」とアドバイスを受け、以降、禅に取り組みたいという気持ちを持ち続けていました。今、ご縁があつて龍泉院参禅会に参加しています。龍泉院は、広大な境内を有する歴史ある閑静な寺です。その立地は市街地からそれほど遠くはないのですが、境内は山寺の風情があります。その中の静かな坐禅堂で坐禅を行っています。

また、禅の修行の一つである作務にリーダー松井氏の指導の下で参加しています。月に二〜四日、松井氏から時期や植物の種類毎に剪定、除草などを考慮した指導を受け、境内の景観を整えています。

作務では多くの植物に接します、植物の美しく、強い生命力を直に感じることで、禅への参加を実感しています。

作務の参加は達成感とともに、体の鍛錬にもなることを実感しています。私はもう人としては老境で、体力的には、いざれ限界に達します、だからこそ体の許す限り、坐禅も、作務も続けて禅道に私なりに迫りたいと思っ

ています。

坐禪と作務を通じて感じる私の今の気持ち
は、ある仏教詩人の「何が一番いいか 花が
いちばんいい 花のどこがいいのか 信じて
咲くのがいい」という詩がピタリと寄り添っ
てくれるように感じています。

掃除と私

柏市 五十嵐 嗣郎

坐禪堂が建立されてから約一〇年経ちまし
た。この間、毎月第一と第三金曜日の二回、
午前九時から一一時半頃まで坐禪堂の掃除を
行っています。

まず初めに締め切っていた戸や窓を全て開
け放して、堂内の空気を入れ換えます。それ
から電気掃除機で禅牀の畳の埃を吸い取りま
す。畳に積もった半月分の埃が吸い取られ、
畳が少し白みがかってきます。この白みがか
つてきれいになるところを見るのが何よりも
うれしく、自分の埃も落ちて行くような気が
します。

次は床の拭き掃除に取り掛かります。内單
の床を雑巾がけしていると、時々虫やヤモリ
の死骸に出くわすことがあります。そのよう

な虫たちには冥福を祈りながら、「お前は有難
くも坐禪堂で往生したのだから、来世はきつ
と人間界に生まれ変われるぞ」と、声を掛け
てやります。



雑巾がけをする五十嵐さん

次は外單や玄關の廊下に移りますが、外單
は雑巾がけする距離が長く、四つん這いにな
って一往復すると息が上がってしまいま
す。そこで小休止を入れて周りを見渡すと、
『普勸坐禅儀』から椎名老師が揮毫された
「端坐六年之蹤跡可見」と「面壁九歳之聲名
尚聞」の対聯が目にとまります。

対聯を眺めながら「いい字だな！」と惚れ
こんだり、または外單の上に掛っている「常
規」を眺め、これもまた「いい字だな！」と
思っ読んで行くと、六番目に「清潔を宗と

し、清掃を重んずべし」、七番目に「身命は無
常なり、常に光陰を惜しむべし」とあるのを
見て、これはウカウカしてはいけな
いと思ひ直して、また拭き掃除に戻ります。

このような掃除作務を続けてもう一〇年、
まさに無常迅速です。

「作務と私」

鎌ヶ谷市 相澤 善彦

私が作務と出会ったのは、当山への初の来
山翌月平成一三年の五月ごろである。かれこ
れ二三、四年前のこと。

四月末の参禅会は、例年のタケノコ堀であ
り初めて裏山の孟宗竹林とご対面！、三月に
水戸の偕楽園の竹林も目にしており、タケノ
コは豊作ではあるが竹林の景観にはいささか
乱れているなど感じ、椎名老師に「自分なり
に手入れをさせてもらえませんか？」と願
い出た。勿論の快諾を「お好きなように存分
に！」といただき今日に至っている。

その間、茨城の建築業の中村さん（参禅会
同期一ツ年長）や我が家内、次男、そして小
林さんなど皆さんのご協力を得て今日の景観
となっている。この間に切り倒し整えた竹の



無心で「作務」に励む相澤さん

本数は千本は優に超えていると思う。

作務への集中、達成感などは「坐禅」そのものであり、むしろ重く感じる。作務をする自分とそれを見つめる心の中の自分がいると感じている。「一人作務」とは、外からの視線であり当事者は「一人称」のなかにおり「一人」ではないのである。竹草木は日々伸びまた朽ちていく、終わりのない繰り返し、行、乱れては整えの繰り返し。その行が「作務」と心得ている。

|| 中原さんの逝去 ||

六月末に、私の一人作務にお顔を出され、「相澤さんが退職したらまた一緒に作務ができますね！？楽しみにしています、暑いから気を付けて！」との声は今も耳に残ります。

中原さんが初めて来山の時に、「作務」にお誘いしたのは私である。一人では手が足りないので、お手伝いを募ったことに「私！、お手伝いします！」と言っていたいただきました。

「冥福をお祈りいたします。ありがとうございました。」

人生最後の作務

松戸市 小畑 節朗

「作務」と利益追求のための「作業」との違いは何だろうか。例えば「掃除」、作業現場では掃除は生産機械とそれを取り巻く現場を掃除できれいにして作業効率を増し、故障を見つけ易くすることだと教えられた。

翻って仏道の世界は、「綺麗だからこそ更に掃除をする」のだと明石方丈様は言われる。椎名老師は、「掃除作務は仏道修行である。」とのお言葉に辿り着く。世法と佛法の差である。

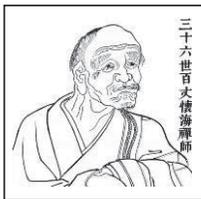
年をとる悲しみは、何と言っても身体の原因がままならないことだ。五年前までは坐禅堂の前の草取りが出来た。今は聖僧さまのお水を取り換えるのが精一杯。



文殊菩薩様と心を通わせる小畑さん

昔、百丈禪師は弟子に作務用具を隠され作務が出来ない日は、「一日作さざれば一日食らわず」との自己規律に即し、食事をとらなかったという。

老耆ろうぢはせいぜい参禅の日に、聖僧文殊菩薩にお給仕をすることが、人生最後の作務であります。合掌



三十六世百丈懷海禪師

百丈懷海禪師

同禪師は、唐代の偉大な禪匠。修行道場の百丈山において厳しい生活規範「百丈清規」のもと多くの修行僧を指導した。

近況



惠堂
椎名宏雄 頓首

私は今、流山市東深井ふかいにある老人ホームで起居しています。満九〇歳での車イス生活が、いかに辛くいかに惨めかは、経験しなければ絶対に分からないでしょう。昨年正月二七日、明日は初不動だという日、二階部分の庇ひさきにあまりにも樅の葉が積って見苦しいので、梯子を掛けて登って掃除し、降りる時に梯子が滑り落ち、地上五mの高さから左半身をタタキに強打して人事不省。我孫子の病院で手術しましたが、左半身は不自由な身となりました。それこそ全国の知人から沢山のお見舞いを頂き感謝感激です。

ただ頭は無事でしたから、『沼南の宗教文化誌』の続編など二冊を刊行し、下部に載っている専門書三巻も来年中には完結の予定です。完結すれば、きつと

文化勲章でしょうか？ 来年の秋が楽しみですね？

又別に、諸方から頼まれた論文や、参禅会で約三〇年間掲載してきた『従容録』百則というシロモノを、分かりやすい形でしかも学修できるようにして刊行したいと努力しています。まだ出版社は未定で

すが、これも仏教の出版の質量とも豊富な京都になると思いますが、無仏法県といわれて来た千葉や、採算第一で凌ぎを削っている東京と違い、伝統と歴史を重んじる文化庁を据えた京都は、やはり我々日本人の誇るべき古都であり文庫であります。



椎名老師と夫妻が住まわれる施設の美しい庭園

宋元版禅籍の文献史的研究〔全3巻〕 椎名宏雄 著

著者の宋元版禅籍の文献史に関する研究を全3巻にまとめる。論文約100、解題類130、目録・講演集10、総計240編に及ぶ。これらの著述を伝記・系譜、燈史、清規、綱要、詩文、語録、偈頌、公案、注解、目録、講演録に分類しまとめた研究者必携の書。

- ◎第一巻：序論／伝記・系譜／燈史／清規／綱要
- ◎第二巻：詩文／語録
- ◎第三巻：偈頌／公案／注解／目録／講義録／索引

【推薦文】 野口善敬（臨濟宗妙心寺派宗務総長）
永井正之（駒澤大学総長）



第2巻／2024年6月刊行・現在配本中

臨川書店・京都

龍泉院の四季の花

(二)

坂牧 郁子

令和六年の元日は、穏やかな新年の幕開けでした。が、一転、午後四時過ぎには、日本中が驚きと悲しみの内に、自然の驚異を感じました。能登半島地震でした。人間は避難しますが、植物は動く事ができません。東日本震災の折、瓦礫の中で咲いた水仙が印象的でした。

一月、龍泉院では、冬晴れの下、六地藏堂横の紅梅が満開、白梅は少し遅れての開花となりました。

二月、暖かい日があり、雲堂前の河津桜は写真スポットでした。人目につきにくいですが、雲堂右手奥にも河津桜があります。

三月、令和六年の三月は寒い日が続き、桜開花のニュースも、のび延びとなりました。

迫力ある姿の「臥龍藤」



天女の衣のような「シャガ」



例会の頃には、土佐みずきの黄緑、連翹の黄、白木蓮の白、水仙の黄、雪柳の白、すみれ草の青、木瓜のピンクと雲堂横は賑わいました。

四月、小中学校の入学式の頃、関東は染井吉野が満開となりました。

境内は、観音像横に牡丹が、紫がかった赤やピンクの花で、人々の目を引きつけました。

梅の古木が臥龍梅と言われますが、藤の枝が地を這うように延び、その姿は臥龍藤、花房が地につきそうで、花付きも見事でした。花蘇芳、石楠花、つつじ、大手毬、小手毬、月桂樹、常盤マンサク、ピラカンサ、浦島草、宝鐸草、エビネ蘭、紫蘭、金蘭、銀蘭、シャガ等、豊かな花々に彩られました。

シャガについては、直木賞作家の黒田夏子

生氣漲る「菩提樹」



貴重な野生ラン「金欄」



の短編「タミエの花」で取り上げられています。主人公タミエが「デンニンゴロモ」と名付けて譲らなかったシャガは、純白にさつと、筆でなでたような紫と橙の線が入り、本当に天女の衣のような花です。厨の裏と真竹林の下方で、龍泉院の秘境に咲いていました。

五月、花の盛りはサツキツツジへ移り、刈り込まれた綺麗な形のまま咲きあふれ、大悲殿へ誘います。若葉、青葉の生氣漲る境内、山崎弁榮の菩提樹のひこばえが、高みをめざして、延びている姿が印象的でした。

「一日接心」円成す || 明石方丈様の講話に大感銘 ||

六月二日

六月二日の日曜日、龍泉院にて一日接心が行われました。当日は朝から、今にも雨が降りそうな不安定な天気でした。

参加者は明石方丈様、参禅会会員二二名の計一三名でした。

八時に参加者全員が集合し、説明が始まります。今年も、坐禅は全部で四炷、その四炷目の前には行茶を行います。

接心の合間の講義は、明石方丈様が自らの半生を語っていただけのことです。

また、例年二回に分けていた普勸坐禅儀は四炷目で全て読むこととなりました。

八時二〇分、明石方丈様の「これより一日接心を開始する」との宣言で一炷目が開始となりました。その後、経行、二炷目と粛々と進みます。

二炷の坐禅終了後は明石方丈様の講義となります。前半は明石方丈様の生い立ちから自衛隊入隊までの話を中心でした。

阪神大震災における自衛隊の活動に感銘

を受けて入隊を志したこと、入隊時のサポート体制の厚さに驚いたこと、入隊後に担当した業務、東日本大震災における活動等についてお話しいただきました。

前半の講義終了後、本堂前で集合写真の撮影を経て、中食となります。

一二時四〇分から第三炷。その後は再び明石方丈様による後半の講義となります。

自衛隊を除隊後、僧侶を志し、智源寺へ入門した後の修行時代を中心に講義していただきました。

講義終了後は坐禅堂へ移動し行茶、そして第四炷。行茶のお菓子、小畑節朗氏からの添菜であり、感謝していただきました。第四炷中には普勸坐禅儀を全員で、全編をとおして読誦いたしました。

第四炷を終了し、大悲殿にて茶話会です。参加された皆様の感想としては、明石方丈様の講義に感銘を受けたという声が一番多く聞かれました。



講義をされる明石方丈様

また、二炷目の坐禅が四〇分となつてゐるため、長く感じたとの感想もありました。小畑節朗氏によると、かつての一夜接心時代、早朝の二炷目に行茶を行っていたことから、坐禅時間を長めに設定していた名残とのことです。

一日接心の間は持ちこたえていた天気でしたが、終了後の帰宅時には土砂降りとなりました。

参加された皆様の気持ちですが、天気を持ちこたえさせていたのかもしれない。

(記録…吉澤誠)

山内動静

報恩感謝の「降誕会」厳修す

去る四月八日、午後二時から、龍泉院本堂において、明石導師様、参禅会会員二名の参加にて、釈尊誕生奉祝の法要を行いました。



本堂に安置された花御堂

本堂には花御堂が置かれ花御堂に安置された釈尊の誕生像に、甘茶を灌頂します。

法要では『般若心経』を誦読

して報恩の供養を行いました。法要後は、明石方丈様から「むなしさと向き合う」と題したテーマの法要を賜り、常に時を大切に思い、修行に励まなければならぬとお諭しいただきました。その後、報恩の坐禅を一炷結んで円成となりました。(杉浦)

台風接近の中「施食会」大円成!

今年の施食会は非常に強い台風七号来襲のため、本堂の設営は、急遽前日の午後三時から参禅会員五名の協力を得て行いました。

今年には台風の影響を考慮して、五色幕張りは止めることにし、柱の水引柱巻と横断幕だけを付けることに致しました。また、施餓鬼棚を須弥壇脇の納戸から出して、所定の位置

飾り付けをする山桐さん



にセッティングし、四方に笹竹と四天王幡を括り付け、施餓鬼棚の後方には五如来幡を掛けました。さらに来場者用の椅子を四〇席セッティングしました。二時間ほどで前日の準備作業は終了しました。

八月一六日の当日は、朝から小雨混じりの空模様となり、前日までの猛暑は一服しました。午後一時から新盆の方々がお見えになり、午後二時から明石方丈様を導師とし、六名のご随喜の僧侶の方々と共に施食会が始まりました。



明石方丈様に導かれる施食会

『大悲心陀羅尼』などのお経が読まれた後、新盆を迎えられた方々のお名前が読み上げられ、『修証義』が唱えられる中、新盆関係者のお焼香が行われました。また、『大悲心陀羅尼』などのお経が読まれた後、『修証義』が唱えられ、今度は龍泉院の役員や参禅会員(九名)が焼香しました。

午後三時に施食会は終わり、新盆の方には卒塔婆とお土産をお渡し、新盆以外の方の卒塔婆は、台風のため本堂の中に並べることにしました。

卒塔婆を受け取りに来られた方々は、自分の卒塔婆を探してから、墓地の方に向かわれました。我々も施餓鬼棚や幡や椅子などを片付け、小畑節朗様からの添菜をいただいて、午後四時に龍泉院を後にしました。(五十嵐)

想ひごと

生死のふるさと

我孫子市 清水 秀男

「生まれたところだけがふるさとではなく、死んでいくところもふるさと。宇宙をふるさとするれば、一緒のところになりませす」

この詩は、童謡「ぞうさん」の作詞で有名な詩人、まど・みちお（一九〇九〜二〇一四）さんの詩です。まどさんは、独自の感性で自然の中の様々なものを見つめ、存在するものすべてに価値と意味があり、お互い関係しあう仲間であり、どんな小さなものでも見つめていると宇宙につながっており生かされている。そして、「存在すること」の不思議さ・素晴らしさ・尊さの深い意味を、平易な言葉で一〇四歳まで綴り続けた人です。

ありし日のまどさん



まどさんの死生観ともいうべき前記の詩を、私なりの解釈も含めて味わってみたいと思います。自分分は父と母の不思議

な出会いによつて、この世に生を授かった。生物の誕生が三八億年前とすると、それ以来欠けることなく連続と続いた貴重な有難い命の連続体の一コマとして現在の自分の生がある。そして、生あるものが死を迎えるのは避けられない必然である。まどさんは、その営みに人間を超えた「宇宙の意思」を感じると言う。

人間は大いなる命の根源である宇宙の意思とも言うべきものによつて生まれ、生かされ、死を迎え、命の連続体の一つとして宇宙に還つていく。その意味では宇宙をすべての存在を包含する「ふるさと」とすれば、生まれたところも「ふるさと」だし、死んでいくところも「ふるさと」ではないだろうか。

生命誌研究で著名な中村桂子氏は、まどさんの詩は生命誌の考え方に通じるものがある。生と死は対語ではないと考えると、死もそう恐れるものではないとコメントしている。まどさんの詩に共鳴しながら、更に私の思いを付け加えてみたいと思います。

宇宙を大自然と言い換えると、人間は大自然「ふるさと」で生まれ、死んで大自然の「ふるさと」に還っていく。

肉体は分解され、分解されたものは悠久な大自然の不断の循環活動の輪の中に入り、

命は形を変えて新しい生を得ていく。その意味では死は終着点ではなく、新しい生の出発点だと言えるのではないだろうかと思います。そして、自分のDNAは命の連続体として子孫を通じて継承されると共に、現世に残した精神的「いのち」は、直接・間接に影響を与えた人々の心の中に宿り、後世に語り継がれていく。また小説、随筆、詩歌等書き記したものの、絵画、彫刻、音楽、写真等製作されたものを通じて、時空を超えて後の世の人々の心の中に自分という存在が形を変えて永遠に生き続ける。その意味で精神的「いのち」は不滅であるとも言えるのではないのでしょうか。

私は一昨年、八時間余に及ぶ食道がんの手術を受け、その後も四回の腸閉塞で入院を繰り返し、死を覚悟した時もありました。今のところ二年目の検診を受け、幸いがんの再発・転移はなく、腸閉塞も小康を保っています。しかし早晚訪れる不可避の「死」の問題を、まどさんの詩を私なりに味わいながら、思いを巡らしてみました。

そして、残された宇宙に還るまでの命を「一日一生」と心得、毎日を精一杯生き切つていきたいと思っています。

「自由」について想(うた)

我孫子市 小畑 二郎

パリ・オリンピックの開会式にフランスの三色旗をイメーajしたアトラクションの映像が何度も報道された。三色旗の赤と白と青は、それぞれ自由・平等・博愛を意味している。

そのうちの「自由」とは、鈴木大拙によれば、仏教においては、「自らに在り、自らに由り、自ら考え、自ら行為し、自ら作る事である」。西洋では、政治的自由が強調されるのに対して、仏教では、むしろ精神的(靈性的)自由が大切にされてきた。つまり、我執を捨て、無我の境地から、本来の自己に基づいて判断し行動することこそ、禅的な「自由」なのである。

しかし、精神的な自由が実生活において発動されるには、様々な問題がある。日本を含む東アジアでは、長い間、封建的な家父長制が支配してきた。妻や長男以外の子供たちは家父長支配の下で忍従してきた。近代の市場経済の発展は、そのような古い家族制度や専制政治を変えるかに見えたが、自由や民主主義は、人々の不断の努力なしには、容易に持つていけないことが分かってきた。たとえより

多くの貨幣や富を備えたとしても、そのために争いを起こしたり、かえって食欲になつたりして満足することができない。また貧困や失業の不安もある。

それでは一体どうしたらよいのか。元国連難民高等弁務官の緒方貞子さんは、前途ある学生の質問に対して、「勉強しなさい」と一喝したという(明石方丈様のご提唱による)。生あるかぎり、すべてに感謝し、ひたすら勉強や仕事に精進努力して道を探す以外に方法はない。

明石方丈様の「法話」は力がある

柏市 杉浦 上太郎

明石方丈様が、龍泉院住職に就任されてから早や三年。三仏忌(涅槃会・降誕会・成道会)の法要の後は、タップリと「法話」をしてくださいます。また、年に二回発行している参禅会会報『明珠』ですが、八一号より、参禅会主宰者としての巻頭言をいただいておりますが、この内容は、僭越ながら正に立派な「法話」だと思っております。八一号の「慎独」や、八二号の「心をもって学び、身をもって学す」が然り。明石方丈様のすべての

お諭しは、我々だけでは「もったいない」、近隣の多くの子ども達にも、ぜひ聞かせてあげたいものと、ひそかに願っております。

この度は、中原悦雄さんの訃報に接し、全身の力が又けるような思いでいっぱいです。

二年前の令和四年一〇月、「参禅会発足五〇周年記念行事《在家得度式》」において、中原さんは一念発起の上、得度を受けられました。椎名老師から授与された安名は「大機禪居士」。そして中原さんは、同年一月に開催した「洞山禪師千百五〇回遠忌法要」では、大聴衆来山に備えた「駐車場係り責任者」の重責を見事に果たされ、多くの参禅会会友から称賛の声を受けておられました。永遠に「大機禪悦」の法悦あらんことを!

おくやみ

故 中原 悦雄 様

去る七月二六日、逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。なお、葬儀等はご家族にて済ませられたとの由です。

沼南雑記

令和六年

●三月二十四日

一八名
(小畑二郎・岡本匡房)

―降誕会―

●四月八日

一名
(小畑二郎・岡本匡房)

【定例参禅会・年間行事】

(一) 内は座談の司会者
*氏名は敬称略

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

- ・日時 毎月第四日曜九時(初参加は八時半) 来山、正午解散
- ・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・提唱

木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱、自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

- ・日時 毎月第一日曜日と第二土曜日
- ・坐禅 九時から一〇時半まで(入堂九時まで、退堂自由)

※会費なし、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心

本年は六月四日、四炷の坐禅と提唱等

一、成道会

本年は二月三日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事

涅槃会(二月一五日)、降誕会(四月八日)、施食会(八月一六日)、歳末助け合い鉢鉢(二月一五日)、団体参禅受け入れ、歳末煤払い(二月定例参禅会後)

一、作務

毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』

年二回発行(①四月八日・②一〇月五日発行)

一、『口宣』

年一回発行

【ウェブサイト】

<http://www.nyusenin.org/> 『明珠』『口宣』のバックナンバーがご覧になれます。

●四月二十八日

一名
(小畑二郎・岡本匡房)

●五月二十六日

二〇名
(小畑二郎・岡本匡房)

―一日接心―

●六月二日

二二名
(小畑二郎・岡本匡房)

●六月二十三日

一四名
(小畑二郎)

●七月二十七日

二〇名
(小畑二郎・岡本匡房)

―施食会―

●八月二六日

九名
(小畑二郎)

●八月二十五日

二二名
(小畑二郎・岡本匡房)

【自由参禅】

三月三日(二〇名)・九日(二〇名)

四月七日(二二名)・一三日(二三名)

五月五日(二四名)・一一日(二三名)

六月八日(七名)

七月七日(一四名)・一三日(九名)

八月四日(八名)・一〇日(七名)

【奉仕作務】

三月一日(五名)・二五日(九名)

四月五日(二〇名)・一九日(九名)

五月三日(七名)・二七日(九名)

六月七日(八名)・二一日(三名)

七月五日(九名)・二九日(九名)

八月二日(七名)

【令和六年番幹事】

幹事 小畑二郎

々会計兼務 岡本匡房

【編集後記】

▼先日、上野の東京国立博物館で開催中の「神護寺展」を拝観してきました。神護寺創建二二〇〇年、空海生誕二二五〇年を記念して開催されたもの。

平安初期彫刻の最高傑作である国宝「薬師如来立像」や、約二三〇年ぶりの修復を終えた国宝「両界曼荼羅」などが展示され、その素晴らしさに圧倒されてきました。

曹洞宗にも多くの文化財がありますから、一度国立博物館で「永平寺展」などを開催し、曹洞宗の底力を示されては如何でしょうか。(香駒)

▼今年度から仕事が忙しくなり、いろいろ厳しい状況ですが、参禅会のおかげで持ちこたえております。

今回の『明珠』は作務特集であります。大変申し訳ないことに作務に参加したことがあります。

作務も大事な修行であることは承知しておりますので、いつかは参加したいと思っております。(吉澤)

▼新編集委員(五十嵐・吉澤・杉浦)になって、早や二年目となりました。親しみやすく、読みやすい、多くの方に執筆をと心がけ取り組み中です。今号は「作務特集」。投稿者の「作務」への真摯な姿勢に大いに感服。

七月二六日に逝去された中原悦雄さんもこよなく「作務」を愛された。同氏は「作務特集」に投稿、感謝。「ツナミ」を逃れる要諦は「デンデ

ンコ」。全て「デンデンコ」。(宏済)

龍泉院

参禅会会報

八二号

● ●
印 発

刷 行
株式会社秋元印刷 / 天徳山龍泉院

千葉県柏市中央一―一八

〒044-7191
2316
69

「坐禅」体験のおすすめ ～「椅子坐禅」もできます～



ときに、本物の坐禅堂に坐り、自己とじっくり向き合ってみてはいかがでしょうか。坐禅の作法等は、ご指導いたします。

・坐禅体験の申し込み

ホームページ(<http://www.ryusenin.org/>)

電話(広報担当・五十嵐)080-6571-4154

・体験日:巻末頁の「簡介」に記載の定例参禅会か自由参禅のどちらかどうぞ。

龍泉院参禅会